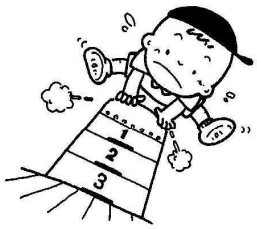
総持寺と私(No3)

男には成長の過程で越えなければならない関所のようなものがいくつかあります。そしてそれは甲殻類が脱皮する儀式のようでさえあります。ある時は勇気を試す場であったり，またある時は男の友情を確かめる機会であったりします。

総持寺の山門をくぐると寺の中庭に出ます。その山門と中庭のちょうど境(さかい)に境内(けいだい)への引き込み用水路があります。境内を曲がりくねって流れているのですが，山門に沿って流れている部分だけはまっすぐで石の上ぶたがかぶせられています。幅70㎝，高さ40㎝程度で子ども一人がほふく前進(はって進む)でやっと通れる広さです。トンネルの長さは20ｍくらいでしょうか。

当時の私たち男の子は小学校時代にこのトンネルをクリアすることが暗黙の掟(おきて)でした。なぜなら，中学生になってしまえば体が大きくなってくぐることができません。しかもこの儀式に挑戦するには時期が限られていました。春から夏にかけては心字池に水を取り込むので用水はほぼ満水状態です。これで儀式を行うのは無謀というものです。(いつやっても無謀なんですが，多少の分別はあったのでしょう)　時期は水のほとんど流れない秋です。

５年生くらいだったと思います。ほとんど余裕のない腹ばいの状態で真っ暗の空間をただ前へ進むことしかない恐怖感は今でも忘れません。ところどころに上ぶたの石の継ぎ手から漏れくる光が文字通り命の光でした。友だちは出口の穴から私の進度を確かめるべく，入れ替わり立ち替わりのぞきます。しかし，これは挑戦者にとってとても迷惑なことでした。なぜなら，出口の明かりが見えないからです。ともあれ，このトンネルをこえることで私たちは男になりました。



先日，当時を懐かしむべく山門をくぐって見ると，このトンネルは砂利で埋まって高さが20㎝ほどしかありません。これでは次の時代を担う我が後輩たちを男にすることはできません。

合掌！